

第5回 第2次瀬戸市教育アクションプラン推進会議 議事録

日 時：平成29年7月26日（水）午後3時から午後4時45分まで

場 所：瀬戸市役所4階大会議室

出席者：

<会長>上川 和子

<副会長>吉田 淳

<委員>一尾 茂正、田中 直美、深見 和博、福岡 明、福田 直美、福留 正康、船坂 礼子、水谷 友里、和佐田 強（50音順）

<オブザーバー>田口 浩一（交流学び課長）、藤井 邦彦（交流活力部次長兼地域活動支援室長）、山崎 康永（健康福祉部次長兼こども家庭課長）、上田 喜久（社会福祉課長）

<事務局>涌井 康宣（教育部長）、松崎 太郎（学校教育課長）、中桐 淳美（図書館長兼視聴覚ライブラリー館長）、早川 寿（学校教育課主幹）、加藤 淳（学校教育課専門員兼指導係長兼指導主事）、梶田 明敬（学校教育課専門員兼指導主事）、清水 隆之（学校教育課企画係長）、水野 華（学校教育課主事）

議事録：

（会長挨拶）

夏休みに入り、子どもたちは盆踊りや夏のプールを楽しんでいる。それは地域の方々やPTAの方々、学校の先生方が一丸となり準備していただいているおかげである。そういった努力により地域の方々も楽しめる夏の風物詩といえる行事となっており、大変ありがたいことである。このアクションプランにはそのような細かい行事についての記載はないが、それも大切な行事の1つだと認識することが大切だと感じている。本日は、点検・評価報告書について時間をとり、深く議論をし、皆さんの意見を頂戴する予定である。

1 報告事項

(1)教育市民フォーラム「キミチャレ2017」応募・選考状況について

学校教育課企画係長より、資料1に基づき概要説明。

○委員

応募・選考結果整理表にある「その他」とはどのような児童・生徒を想定しているか。また選考の際の基準をお聞きしたい。

○事務局

「その他」については、昨年市内公立学校に通う子どもが市外の私立に通う友人と一緒にチャレンジをしたいという応募があったため、市外の学校や特別支援学校、外国人学校の友人とのチャレンジの応募があった場合に記載することとしている。選考基準については、教育長はじめ市教委4名とキャリア推進協議会2名、合わせて6名でエントリーシートをチェックし「このチャレンジを応援したい」と思った児童・生徒を選考した。

○会長

応募してきた子どもたちの中で中学生の占める割合が少ないのが残念である。チャレンジする中学生がもう少し増えるといいと感じた。また各学校によって、キミチャレへの取り組みが熱心な学校・子どもの意思に任せている学校の差が見受けられる。全学校から少なくとも1人は応募があるとことを望む。

(2) 第1回瀬戸市小中一貫校開校準備委員会結果について（資料番号2）

学校教育課長より、資料2に基づき概要説明。

○委員

小中一貫校新設反対の意見の中に「地域から学校がなくなることで地域づくりに問題がある」とあるのを見た。しかし、そもそも学校が地域づくりに果たしてきた役割を今後も学校が担うべきなのか。今まで学校が果たしてきた役割は、本当は別の組織が担うほうがいいのかもかもしれない。そういったことも議論すると、新設校の地区が新しい地域づくりのモデルケースになるのでは。学校がなくなるから地域づくりができない、という意見には疑問を抱いている。

○事務局

開校準備委員会設置要綱の所掌事務(2)に「小中一貫校に関する地域連携に関すること」と定められており、そのテーマを深く議論することも委員会の大きなポイントとなっているため、学校が地域で果たす役割についても議論していく。また、5つの地域から学校がなくなることとなるが、各学校の跡地利用に関して担当は別部署となるものの、街づくりという観点で地元の方々と議論していく予定である。

(3) 第1回学校選択新制度検討委員会結果について（資料番号3）
学校教育課長より、資料3に基づき概要説明

○委員

現在の隣接学校選択制が廃止されることを、市民へくまなく周知していただきたい。現在、市のホームページや広報にて周知していると思うが、さらに周知徹底を図ることが必要である。

○事務局

あらゆる機会を捉えながら、周知徹底していく。

○会長

実際に子どもたちが学校に通う中での制度変更となるため、子どもたちが嫌な思い・さみしい思いをしたり、保護者の方が混乱するようなことがないように注意と配慮をお願いする。

3 協議事項

(1) 瀬戸市教育委員会事務の管理及び執行の状況の点検・評価報告書（案）について

○企画係長

- ・8月定例教育委員会で議案上程後、9月定例瀬戸市議会にて提出、公表すること
- ・評価・点検報告書における評価基準について
以上を説明。

○委員

基本施策1について、市教委や関係部局の実際の姿が反映されていないと感じる。市教委も各学校ももっと色々な取り組みをしているのに、それがこの点検・報告書反映されていないために、市民の方に伝わらないのが残念である。

○事務局

水南小・水無瀬中では授業の中で発達障害の子どもでもわかるような授業づくりを進めているし、八幡小や原山小では基礎学力の定着を目指して独自に漢字検定や計算の検定試験に取り組んでいる。ICTに関して、さくらんぼ学園ではiPadの画面をタッチすることで意思を伝えたり、下品野小学校では黒板半分をプロジェクター

とし視覚的にわかりやすい授業を行っている。また光陵中では、地域未来塾を開き大学生ボランティアに協力してもらい学習支援をしている。このように各学校で特色ある取り組みを行っているが、全 29 校分はどうしても書ききれず、書ききれない部分をまとめるとこのような記載になってしまった。来年度以降はいくつかの取り組みをピックアップして記載をすることも検討する。

○委員

基本施策 1 は基礎的、基本的学力の習得についての部分であるので、取り組みすべてを網羅して記載することは難しいのではないかと。

○委員

今回から☆で評定することで可視化が進み、☆をつけた後どうしていくかが大切だと感じる。現在の評定が☆2つだとして、具体的に何をしたら☆3つになるのかの提案の記載があるといいのでは。実際には難しいかもしれないが現場の人しかわからない空気感もあるはずなので、そういったものが反映された評価・点検報告書であるといいと思う。またそれをもとに各地域、保護者の方の話し合いの材料になることを願う。

○会長

以前の点検・評価報告書と比べて大変わかりやすい報告書となっている。可視化されたこの報告書があるからこそ、市民の方もアクションプランについて考え、何が足りないか考える機会となるし、そういった機会があるといいと思う。また今後の方策等について、今はその部分を切り取って他に張り付けても違いがわからないような抽象的な記載となっているため、どうやったら☆3つになるのかもっと具体的にわかる記載があるといい。

○委員

10 頁、☆の判定基準をもっとわかりやすい記載にした方がよいのでは。☆2つの場合、() の記載があることで一部課題が見受けられるのか進捗が遅れているのか、わかりにくい。

○副会長

評定は☆4つまでで行うとよい。目標に対し努力したことに対しては☆4つをつけ、教育委員会として施策に自信を持って取り組んだということアピールしてもいいのでは。施策に関しては経費をかけてやっていることなので、経費の問題なのか労

力の問題なのか一概には言えないものの、市民から「これだけ税金を払っているのに☆2つなのか」と思われないような努力が大切である。

○事務局

() の中は無くすこととし、評定の仕方を☆3つにするか☆4つにするかは来年度以降の検討課題とする。

○委員

基本施策8について、唯一の☆1つとなっている。☆1つ故に今後の方策についても大変力を入れて取り組んでいく必要があると思うがどうか。

○会長

図書館を作りかえるという目標があると想定して、☆1つとしているのか。

○事務局

PDCAの評定は、どうしても指標の数値に引っ張られてしまう傾向がある。市民の方に公表していくうえで、指標を下回っている現状の中で☆2つをつけるのは難しいと感じる。

○図書館長

本来実績値から目標値に向かって数値をあげていくはずだが、もともとの実績値を下回ってしまったという結果から☆1つとなった。地域図書館も毎年作れるものでもなく、10年間の計画の中で順次作っていくものである。貸出冊数についても、社会的な傾向に左右されるものであるため常に放物線を描くような数値となるわけではない。中長期的に見た場合の傾向については捉えられることもあるが、1年ごとの評定であるためこういった評定をせざるを得ないところが実態である。また今までは本の貸し出しが図書館サービスの中心であったが、今はそれに限らず情報発信やサービスの多様化が評価される時代になってきたため、指標について最考する必要があると感じている。

○会長

図書館の方々がどれだけ努力しているかは図書館へ行くたび感じており、駐車可能台数が少ない中で、これだけの来館者がいるのは素晴らしい。それ故☆1つというのは残念である。

○委員

サービス内容としては大変努力をしているが、建物が古くどうしても限界はある。それを踏まえて、市民に公表する上で☆1つとするのは致し方ないかと思うが、地域の方やボランティアさんの協力も多く、今ある中で最大限の努力はしていると思う。現状では地域図書館を増やしていくしかないが、それでも学校内スペースが限られていて階段や坂道を上ることがどうしても発生するため、地域の方が通うにはやや支障はある。しかし図書館の中の本の差し替えも固まっていないことや、地域ボランティアの方の活動も活発になっていること、大型絵本も増えていることもあり、個人的には☆4つの評価である。

○委員

各小中学校のホームページを見ると司書の取り組みが載っているため、それもどこかで表に出していけるといい。本館にいかないとサービスが受けられない状況ではないため、それも含めて10年後の指標とするといいのでは。

○副委員

☆は平成37年度までの進捗についての評価なのか、単年度の評価なのか評価者によって意識が違ふと思われるので、そこを統一する必要がある。平成37年度までの進捗だと考えた場合、最初の1年でできることはなかなか少ないため、☆5つまでの評価にした方がいいのではと感じた。各施策についての記述で、☆1つや☆2つというのは何か問題があるということなので、なぜそういった評価になったのかの記載をし、その課題があった上での今後の方策があるといい。また、基本施策17について、目指す姿と評価指標が馴染まないのではないか。サブ評価指標を作成してはどうか。

○事務局

目指す姿と評価指標について、副会長と同様の意見を複数いただいている。既定では5年後にアクションプランの見直しが想定されているが、指標を再検証する機会をそれより早くご提案させていただきたい。

○委員

時代の巡るスピードは大変早いので、見直しは早めに行うべきである。

○委員

ICT教育を取り入れることで子どもが読み書きが苦手にならないか心配である。な

るべく短い文章で多くの情報を入れる、ということが情報社会の中で先行してしまっていて、昔の文学や長文を読むことが苦手な子どもたちが増えている。読み聞かせボランティアの際も長文に対する苦手意識を持つ子どもが多く、昔の文学や長文を学ぶ機会も必要ではないかと感じる。

○会長

大学入試制度も、マークシートで選ぶことから記述をすることに変わっていくので、学校の中でもそれに対応できるようにしていくべき。

○委員

原山小学校は様々な国籍 の子どもがおり多文化共生といった特色のある学校である。外国籍の子どもたちは日本語を読むことに非常に抵抗があるため、例えば日本の伝統を教える場合はタブレットに写真を取り込み視覚的な理解を促している。日本人でも新聞をとっていない家庭も多く、全国学力・学習状況調査の長文問題が苦手な子どもが多い中で、読み聞かせボランティアの方々が読み聞かせをしてくれることが非常に有用である。思考力・判断力・表現力が求められる中で、文章に表すことをどのように身につけさせるか、また英語でのコミュニケーション能力を身につけることも喫緊の課題として捉えている。

○委員

昨年度各学校を回って、読み聞かせボランティアの人数が大変多くまた熱意をもって取り組んでいると感じ、読み聞かせボランティアの皆さんの交流会を行ったところ大変多くの参加があった。読書離れに対して「地域とともにある学校づくり」の中で、地域の方々と何かしらの形で取り組んでいけるのではないかと感じる。地域の皆さんと子供の会話は、家庭教育にも繋がっていくと思う。

○委員

本地で地域力向上委員会が地域未来塾と同様の学習支援を開始した。共働きが増えた今、地域の方々に勉強を教えていただけるといのは地域とともにある学校づくりに繋がっていくのではないか。PTA の経験から食育に関心があり、瀬戸市は朝食を食べている子どもの割合が高く、驚いている。瀬戸市の割合が高いのか全国的に高いのかはわからないので、そういった点もわかるといいと感じた。

○会長

各学校で食育に熱心に取り組んでいるので、事業実績に一言記載があるといいか

もしれません。基本施策 10 で体を動かすことが好きな子どもの割合が全国平均を下回っており、この報告書を見たときに驚いた。見るたびに新たな発見のある報告書になっている。

○委員

インターネットが普及し、子どもたちが簡単にいろいろな情報を手にすることができる中でも、読み書きの能力は重要だと感じる。自分の子供の個人懇談の際に「資格を取るといい」という話があり、親子で漢字検定に取り組むことにした。子どもにやりなさいということは簡単だが、一緒にやっていく過程が子どもの成長につながっていくと思う。

○教育長

可視化された状態で伝えないと物事が伝わりにくい時代になっており、またそういう状況に社会全体が慣れてきている。教育に関して数値化することはなかなか難しいが、あらゆる工夫をしていけばある程度いまの状況や課題がわかる力がついてきたのではと思う。評定も奥が深く、☆1 つでも☆4 つの意味があることもあるし、☆4 つつきたいということは施策に対しての取り組みに対し自信があることの表れでもあり、強みでもある。また、意見・提言の中に素晴らしいものが随所に見られ、これからどう展開していくかという広がりを見せていくのでは。第 2 次アクションプランでは委員の皆さんがつながっているいろいろな方々に、このプランを浸透させていくことができると思った。地域とともにある学校づくりというのは第 2 次アクションプランの中で大きなメインテーマであり、学校は教育目標を作っているが、PTA の方々の間や地域の方々の間でもそれぞれ目標を作って行動していくといった当事者意識が大変重要となってくる。アクションプランと点検・評価報告書を隣に並べて改めて読んでみると、プランの中に出てくる事業をセット化しているので指標に関しどうしても無理が生じてしまうという課題はあるが、そういった問題点があることを認識したうえで評価をしていけば大きく狂うことはないと思っている。ここまで委員の皆さんの総意で報告書を作成できたことが、今現在の宝物である。

○副会長

ICT の C はコミュニケーションの C である。iPad やスマートフォンも ICT の 1 つで、その中から得た情報の中でどういった情報を受信・発信していくかというのは ICT の根幹である。日本人はどちらかといえば発信が苦手な方だが、例えば読書に関し自分で拡大したり入り込んだりすることが可能であるし、読み取ったことを情報発信することもできる。読み書きはもちろん大切なことだが、多くの情報の中で適

切な情報を捉え、考え、組み合わせて発信できるようになることが、ICT教育を行って行く中で大きなメリットであるため、各家庭でもそういうことを切り開いていける子どもたちであってほしいと願う。

○会長

原案通りで公表することを承認する方は拍手をお願いします。

<拍手多数>

○会長

承認いただきましたので、今後 8 月定例教育委員会に上程し承認後、瀬戸市議会に報告し、市民の方に公表することとなります。

4 その他

・事務局より連絡事項

次回日程は、未定